
Nir Admirari

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Nir Admirari

【NFT】

NFT488A

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

空を這う者達の物語。僚機の不可解な墜落。その裏にあるものとは…スカイ・クロラの世界観で語る物語。

プロローグ

ニル・アドミラリイ

砲撃がフォッサルタの残壙をこなこなに打ち砕いているあいだ、彼は地面に横たわり、汗を流して、ああイエス・キリストよここから逃がしてくれ、と祈った。

ねえイエス様どうか逃がしてください。

キリストよ、どうか、どうか、キリストよ。

殺されないよ、ううしててくれさえすれば、なんでもおっしゃるとおりにいたします。

僕はあなたを信じますし、あなた以外にだいじなものなんかなにもないとい、世界中のみんなに話します。

どうか、どうかイエス様。

砲撃は戦線を向こうほうへ動いていった。

われわれは残壙掘りの仕事にでかけた。

朝になると太陽が昇り、その日は、暑く、湿気が多く、陽気で、静かだった。

つぎの日の晩またメストレへ行った彼は、ヴィラ・ロッサでいつも一緒に一階にあがった女の子に、イエスのことを話さなかつた。

彼は誰にも話さなかつた。

(われらの時代にてへミングウェイ)

ステンレスのシリンドラーが不気味な音をたてた。

痛みがないから、飛行機乗りは空に上がってから異常を知る。

そして、空に上がってしまえば、既に手遅れなのだ。

翼の先から、細く、煙を吐いて静かに僚機の墜ちていく様を見た。

実際には、当然のように僕たちを地面に縛り付けておくための何かが其処にあつた。

僕たちは、鳥ではない。鳥の手足でもなければ、くちばしでもない。

僕らは鳥の耳と心臓であるから、僕らが失われれば鳥は飛ばない。

最初に考えたのは、自殺。次は居眠り。いくら考えてても、匹蚊帳が死ぬ理由が見付からなかつた。

実際には、理由なんてものは、ほんの少しのキッカケと後押しする何かがあれば十分だ。

生きていることが理由にもなるし、生き続けることが理由にもなる。

僕らは死はない。もうそれだけで死にたいと思つ理由にならないだろうか。

僕はまだ、死にたいと思つたことはない。そう思つた時には、既に右手を引金に掛けていた。

簡単に幕を降ろせなかることで、簡単に幕を降ろさないことにしている。

トラブルを告げる信号は最後までなく、緩やかに惰性で前に進みながら炎を上げて僚機は墜ちた。

黒い煙がいつまでも不快な臭いを発していた。

決定的に違うのは、ヒツガヤが死んだこと。僕が死なかつたこと。

報告をするのはいつも、リーダーであるヒツガヤの役目だった。

よつぽどの成果やトラブルがない限り、呼ばれることはなかつた。

「つてことは、トラブルの信号はなかつた訳だね」

若い、よく通る声で、あきらかに不満そうだった。

二回、状況を説明したが。二回とも同じ質問をされた。

「はい、信号はなく。無線にも応答はありませんでした。」

「そうか… 事後処理がすんだら、詳しく分かるだろうが、今は待機してくれ」

報告が終わったのは、日が暮れてからだった。

うなぎのようひな質問討議の中で、何度も聞かれた事を仲間にも聞かれた。

食堂では、待っていたように本田と神弟波が僕を捕まえた。

「ヒツガヤは最後に何かいつてなかつたか？」

「いや、何も。」

「信号はなかつたのか？無線も。」

「なかつた。むしろ電源を切つたのはヒツガヤ自身だった。」

「そうか…」

冷えたビールを持ってテーブルに戻つていくホンダを見て。

「こつはど今まで知つてゐるんだね、と思った。」

正確には、僕は嘘をついていた。報告の中では、無線はなかつたと言つたが、ヒツガヤは最後に無線をよこした。

地面からそう遠くない位置だつたよつて思つ。

「…俺の私物はできるだけ早く処理しろ。そして、アサギリを信じるな。報告無用。最後に、ホンダの野郎に先に行くと伝えてくれ。」

「了解。」

厄介な仕事。それも命に關わるよつな。

アサギリの部下になつてから、そつ早くない内に近くの街で殺人事件があつた。

軍は関与を否定したが、ジープが一台なかつたことを僕は知つていた。

ヒツガヤが何を知つたのかは分からぬ。

二段ベットの上にあつたはずの荷物は既になかつた。たぶん分かっていたのだ。

僕が報告するより早く、ヒツガヤが墜ちたことを…。

僕はベットのマットを外した。

ヒツガヤの工口本もなかつた。

ヒツガヤが昨日、そこに寝ていたという痕跡はなかつた。

そこには何もなかつた。

フロイント

「ああ、あがるぞー！」

とロケットは叫ぶと、体をかたく、まっすぐにしました。

「星よりもずっと高く、日よりもずっと高く、わしはあがるんだぞ。
じつをい、うんと高くあがつて　　」

しゅう！しゅう！しゅう！

ロケットはまっすぐ空中へ飛び上りました。

「愉快だ！」

かれは叫びました、

「永久にこんなふうにあがつていくんだ。大成功を収めたぞー！」

しかし、誰ひとりロケットを見ませんでした。

（すばらし）ロケット／オスカー・ワイルド　西岡孝次訳）

まだ遅くないうちに、僕はホンダを連れだしで飲みにいった。

いつも行く、アップルパイの美味しい店でも良かつたのだけれど、ホンダの知っている店に行くことになった。

「コーヒーとサンドイッチ

「僕も同じの……」

店内は明るく騒がしいのに、中には老人が多い。

陽気な老人達の演奏はなかなかだし、サンドイッチも悪くなかった。

「ヨリは、宗教のに匂いがしないだろ?..」

僕もちよつと、そう思つたので頷く。

「悪くない」

気に入ったといつ程度のことだけ、悪くなかった。

飲みに来たまではいいのだけど、ホンダがどこまで知つていてるのか分からぬ。

できれば、ホンダの方から話題に触れて欲しかつた。

「お前の後ろ左から三番目の黒いジャケット」

小声で談笑するふりをしながらホンダが言つた。

僕も、ホンダの後ろを見た。

「入り口に女が一人、コーヒーの…赤いパーカー男が一人。」

「サンドイッチを食べ終わつたらゆつくり外に出て解散。その後、撒いてからいつもの店へ。」

「コーヒーも悪くないな。」

気にするそぶりを全く見せないホンダに感心しながら、僕は時間をかけてサンドイッチを食べた。

その間、できるだけ面白い冗談と、コーヒーについて喋った。

コーヒーに関する冗談は、前にヒツガヤから聞いたヤツだが、面白くもなんともなかつた。

たぶん、仲の良かつたホンダは聞いたことがあると思つ。

店を出ると直ぐに、尾行が着いてきた。

ホンダの方に一人と僕の方に一人。

目的もなく辺りをブラブラするのは気が引けたが、この町にあるのは、酒場か宗教施設か、もしくは売春宿くらいだ。

撒くのは簡単だが、自然と離れたい。

そう思つていると、裏路地のある区画が近付いてきた。

軍服を着ていてる限り、変なやからに絡まれることはほとんどないが、決して治安がいいとは言えない。

低い銃声が一発か二発聞こえた。

いくらガラが悪い連中でも、昼間から銃は撃たない。
撃つなら男の方か…。

尾行のクセに目立つてどうするのだろう。

左に折れて蔭から様子を窺うと、案の定男が銃を向けていた。

リーダーらしい男は腹を撃たれらしくぐつたりしている。

尾行の男は腰を抜かしている。

あまりにも情けない尾行だ。地上戦を想定した訓練はおろか、銃を撃つこともないのだろう。

外見を見ても、まだ若くて幼さすら漂つていた。

ガラの悪い男の一人がナイフを出して尾行の男に飛びかかろうとしている。

銃はまだ地面を向いている。

僕は、非常識にも飛びだして、

「おい、動くなよ。」

と銃口を男に向けた。

どちらかといふと、民間人を巻き込まないために。

二つの銃口を向けられた男は、急に勢いを失い。仲間を連れて退散した。

「大丈夫か。」

「ああ、ありがとう」

男は苦い虫をかみつぶしたような顔をしている。

「人を撃つたことは？」

「ある訳ないだろう」

「なぜ僕を尾行している？」

「気付いてたのか！？」

あまりにも、下手な尾行に気付かない訳がないだろう。

「口径が軍のものよりやや小さい。弾丸が少しどがつている。」

「なにがいいたい！？」

やや、自暴自棄になりながら叫んぐ。

「仲間はどうした？」

「仲間？知らないな、俺は最初から一人だ。」

「ということはホンダの方が本物か…。嘘ではなさそうだ。」

「なんで僕を尾行している？」

「アンナ・アサノ。」

「最悪だな。俺も、お前もな……」

「……」

「アンナには潔白だと聞えよ。じゃないと、依頼主の名前をしゃべつた可哀想な探偵が酷い目にあつ」

「……俺はしゃべつたか？」

「ああ、しゃべつた。」

「最悪だな。」

「実に……」

たぶん、ホンダの方に着いていたのが本物で、こっちはただの浮気調査か。

僕は、まんまと、この情けない探偵に騙されていたのだ。

スリップ

もし天使が空からやってきて
酒にあらざるものてくれたなら
その善意には感謝しても
その飲み物は流しに捨ててしまつにしかず

(G・K・チエスター／空飛ぶ居酒屋)

ホンダはきつちりと尾行を撒いていた。

僕が事情を話すと、やけに真面目な顔で同情してくれた。

冗談として笑ってくれた方がどんなにか良かっただろう。

「お互いに知つてることを全て話そう。」

ホンダが言つ。

僕は、ヒツガヤの最後の無線のことを話したし、彼は例の夜の殺人事件の事をかなり詳しく知つていた。

殺されたのはドクターで、犯人は強盗だつた。しかし、持つていた銃は軍の支給品で、金銭は何一つ盗まれていなかつたという。

「ヒツガヤは知つていたんだ。だれがドクターを殺したのかを。」

「だから死んだ?」

「そうかもしれないし、違うかもしれない。」

話はそれだけだった。

真相なんて知りたくもないし、知つたら消されるのは今度は自分の方だろう。

僕は、部屋に戻つてヒツガヤのことを考えてみた。

彼は死にたがっていたのかみしれない。

そして、何か重大な秘密を隠す為に自ら墮ちたのだ。

その夜はやけに月が明るくてビールが回つた。

ライトの人工的な灯りよりも本物の月の作り出した光は小さかった。

アサギリは何かを隠している。それともアサギリも知らないのだろうか。

地上に居ると、余計なことばかり考えてしまう。

久しぶりに、空を飛ぶ夢を見たい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7488a/>

Nir Admirari

2010年10月12日06時27分発行